

# 幼児教育の指導のねらい



仁 科 彌 生

子どもが将来、より望ましい性格や態度をもったおとなとなるには、幼児期に一体何を身につけさせるべきだろうか、その為には、おとなのどのような指導法が必要であろうか、ということとは幼児を持ったお母さんや保育園の保母さんたちの毎日の問題であろう。アメリカの幼児教育と、一昨年の秋の暮に米国オハイオ州のシンシナチ市で催された米国幼児教育協会総会に出席した時の経験を考え合わせて、幼児教育の指導のねらいについて話すことにしよう。

この National Association for Nursery Education という団体は学令前の幼児―普通、満二才半から六才までの幼児―の集団指導にたずさわっている人たちによって構成されている。

この総会には、幼児の集団指導や保母養成に関係している大学

の心理学・家政学・保育学の教授をはじめとして、文部省・労働省・人局の役人や、大学・病院などの付属保育園、公立・私立の託児所・隣保館などの施設の経営者や保母さんたちが約四百人参加した。

主なプログラムは児童心理学関係の数人の講師による講演と、幼児の遊び、特に創作活動（音楽、箱積木、粘土、絵の具）の材料の展示と、それを使って創意工夫の実際の指導とであった。

幾つか聞いた講演の中で、私が特に興味深いと思つたのは、ブルドユー大学の教授、ウイリアム・マーチン氏の現代幼児教育に対する批判と、それを聞いた保母さんたちの反応であった。

マーチン氏は現代の幼児教育において、指導のねらいと実際が子どもの衝動・欲求を尊重し、子どもたちの生活をそこなわないように、幼児の経験することがらが幼児の要求にそうようにと、

おとなの手で、あらゆる障害物を取除いてやって、幼児にとって最善の環境を作ること**を強調した結果**、いわゆる、温床のような生活環境に育った子どもは忍耐力、抑制力、道徳的知識に欠けると批判した。子どもはそれ程に、もろい傷つきやすい生き物ではないから、保母さんお母さんがたも、幼児に対して、多少し手荒い扱い方をして、幼児が少々の不便や困難に耐え得る強靱な態度を身につけるように指導してほしい、と言われた。

これを聞いてびびくりしたが、この四百人の保母さんたち。と言うのは、参加した大部分が、教育の場の雰囲気は、子どもの衝動・欲求を尊重した自由主義、随意主義でなければならぬと主張する進歩的教育法を信じている人々だったから。幼児の保育園での生活は完全な自由遊びの生活で、人形あそび、箱積木、絵を描く、水あそびなど、したいと思う事、したい時に楽しむ。したがって固定した時間的な枠にしたがって教師中心に子どもを行動させることは時代おくれの悪い教育法と考えている人々だったのである。マーチン氏の批判を聞いて、「それでは、また古い教育方に帰れと言うのでしょうか」とムキになったわけであった。

私はこれらちように、時計の振子の動きに似ていて、一方に、おとな中心のおしつけ主義の教育があつて、その反動として、大振りに揺れた振子の反対側に、子ども中心主義の教育が存在すると

思った。そしてその自由主義の教育の行過ぎをマーチン氏は批判されたのだと思うし、また幼児にとって望ましいと考えておこなっている指導方法において、望ましいということばの具体的な意味や、なぜ、それが望ましいのかという理由などを、保母さんたちに、あらためて考えさせる良い機会を与えたと思つた。

私たちが幼児の生活指導を考へるとき、子どもが将来、より望ましい性格態度をもつたおとなとなるには、幼児期に一体何を身につけさせるべきか、その為には、どのような指導が必要であろうかということが問題になる。

幼児期の生活はすなわち遊びであつて、その遊びの中で、子どもは知恵つき、友だち関係、人間関係の基礎をきずいていく。したがつて正しい友だち関係、人間関係を身につけるのが、幼児期の生活指導のねらいであると言えるし、両親や、保母さんは、毎日の子どもの体験を、その意味で有意義なものとおき代えてやる必要がある。

幼児の生活指導の基本的な形態として、大体三つの種類が考えられる。その一つは、先程、問題となつたおとな中心のおしつけ主義、その二は、子どもの衝動や欲求を尊重した自由主義、その三は、アイオワ大学のグリーンバーグ博士の唱へる幼児の自覚養成に重点を置く生活指導法である。

私たちの日常生活では、これらの三つの方法を、ませて使っている。けれども、三つの方法は、それぞれ異なった心理的作用を伴う。

次に例をあげて具体的に考えてみよう。

ある保育室で四才になるマサオとカズオが一台の玩具のトラックの奪いあいをしている。とうとうマサオは興奮してカズオの頭を叩いてしまった。

この場合、おとな中心のおしつけ主義であったなら、保育さんが直接的にマサオの行動を阻止する。「マサオさん、叩いてはいけません。」「学校では他の子を打ったりしませんよ。」「カズオさんを打ったりするのは、良い子のすることではありません。」など、保育さんはたしなめる。これは、マサオの行動を先生が非難しているわけで、先生というおとなが、幼児の行動について、してよい事、していけない事の決定権を持っていて、そのおとなの権威を子どもにおしつけているわけである。この方法を事態にせまられて私たちはよく使うのであるが、しばしば後味の悪さを経験する。それと言うのは、先生自身、一方的な権威を子どもにおしつけることに不安を感じるし、また、子どもを非難し、おどかさわけではないから、子どもに嫌われる結果となる。

では自由主義の方法では、どうであろうか。

先生はマサオの行動をみても、みない振りをする。勿論、ある時は、先生は、子どもにひとりで問題に取組まして、その体験から学ばせようと、わざと傍観する場合もあるだろう。しかし、先生が、それを無視しようとか、おとなの力に頼らずにひとりで解決させようと決めるのは、多くの場合、どうしてよいか打つ手がわからなかった為であったり、また、打つ手に自信がなかった場合である。

もしマサオが、体力にものを言わせて、カズオに勝てば、トラックを独占し、満足するだろう。あるいはトラックを独占はして、後でカズオに大声で泣かれて、ああ悪いことをしたと罪悪感で心を傷めるかもしれない。もし逆にカズオに負けた場合、マサオはカズオに対して反抗心を抱くだろうし、また自尊心を傷つけられて、くやしがるだろう。いずれにしても正しい交友関係については、マサオもカズオも何も学ばずに終るわけである。

第三の方法では、先生は「カズオさんを打てば、カズオさんもあなたを打ちかえすから。」とマサオの暴力を振るった結果は、彼もまた、カズオから打たれるということを指摘するか、あるいは「もしカズオさんを打つと、カズオさんも怒って、もうこれから、いっしょにおもしろく遊べなくなりますよ。」と、誰でも周囲の友だちから受入れられたい、すなわち、もっとプラスになる交友関

係を持ちたいと思うことを強調して、その為には相手の権利をみるとめ、尊重しなければならぬと教えるわけである。

これらの例で示されたように、おとな中心のおしつけ主義、口小言主義の生活指導では、おとな中心に考えた「良い子」への注文を一方的に抑圧と制約を使って子どもにおしつけている。子どもは欲求や行動を抑圧されると、往々にして反抗的になったり、乱暴をしたりする。するとその行為をまた、おとなにたしなめられる結果となって、更に不安な気持を抱いたり、罪悪感に悩まされたりする。これでは教育目的に不都合であると、この指導法は反対された。そしてその代りに、子どもの欲求や感情が単に考慮に入れられるだけでなく、生活指導の基礎にならなければならぬと自由主義の指導法が強調されるようになった。

ここでは子どもが衝動・欲求に従って振舞うことの出来る自由が認められて、子どもは抑圧から解放されて、十分に自発性、創造性を豊かにすることが出来ると期待された。ところがそれが極端な自由主義、放任主義となると、さき程の例で示されたように、子どもは、正しい交友関係を身につけることがなく、またマーチン氏が指摘したように、忍耐力や抑制力に欠けた子どもになってしまう恐れがある。しかも、自由主義の指導法では、子どもの衝動・欲求の世界に、教師の、おとなの感情、行動を順応させるよ

う、いわば要求しているから、そこには先生側に、一方的な精神的負担をかけているという無理がある。したがって両方も、生活指導のねらいに十分にはなっていないとは言えない。この二つの方法を反省して、新しい方向を指示したのが、第三のグリーンバークの指導方法である。

グリーンバークが主張する、自覚育成を指導のねらいとすることは決して新しい考えではない。しかし、これを指導法として特に強調している点で新しいと言える。ここらは、子どもと教師の要求が共に認められ、受入れられ、そしてかなえられている。

自覚とは、自分と他人、特に他人との人間関係の理解を深めていくことを意味する。まず自分の衝動や感情の表現が他人に及ぼす結果を具体的に認めて、更に他人の感情や行動が特に自分に働きかけてくる結果をはっきり知っていると、そこから、より望ましい、より満足出来る交友関係を作っていく為に、自分の衝動や感情をいかに処理すべきかを考えることが可能となってくる。こうして自分の感情の理解が深くなってくると、他人の感情や、振舞いにすぐに動揺したり、腹を立てたりすることが少なくなるし、漠然とした自己嫌悪や罪悪感などで悩まされることも、少なくともなくなる。

この自覚とは、だんだん深くなっていく日々の経験である。学

令前の幼児は、ちょうど、自分というものを他人との関係において理解し始める段階にある。保育園は、幼児の集団生活において、教師がその幼児の自覚の発達を助長するよい場である。すなわち、幼児が自分の感情（自分に対する気持と、他人に対する気持）を理解し認めるように指導するのである。先の例を、もう一度、具体的に考えてみよう。

この場合、マサオの自覚を深めるには、まずマサオの感情を生かすことばで指摘して、その感情を行動に表わした場合の社会的結果を学ばせる。

「マサオさんが欲しいトラックをカズオさんも欲しがって取ろうとするので、マサオさんが、腹を立てているのは、先生にもよくわかりますよ。でも、それでマサオさんがカズオさんを打ったら、カズオさんも痛いし、怒って、これからもうおもしろくいっしょに遊べなくなりますよ。」ここでは、子どもの腹立ち、怒りという感情を教師は認め、許している。そして、打つという反社会的な他人に害を及ぼす行動を、教師は否認している。子どもの感情を認めている点、これは自由主義的方法であり、その打つという行動を否定している点では、いわゆる抑圧主義である。しかし、この場合この二つの方法を、感情と行動という二つのものを使い分けることによって、十分、指導目的を果していると思う。

子どもの感情・欲求を認めてやることは大切なことである。悲しかったり、腹が立ったりしているとき、おとながその感情の存在を認めてやると、子どもの気持はずっと軽くなり、感情は治まってくる。したがって、感情や欲求を否定したり抑圧したりするよりも、むしろそれを支持し、受入れてやって、それからその感情の表現である行動の社会的結果を指摘して、理解と反省の方へ仕向けていくのが望ましい方法であろう。

母親も教師も、子どもとの日々の接触の中で、積極的に、自分の感情や欲求、あるいは欠点に目覚めていくと、子どもの感情・欲求を受理することが、ずっと容易に出来るようになるし、また愛情を注ぐことも自然に出来るようになる。

以上のことは口で言うのはやさしいが、実際におこなうことは、まことにむずかしい。しかし不可能なことでは決してない。まずおとなも子どもも共に歩み寄って、お互に順応する責任をわかち合うこと、そして、お互の感情や欲求をみとめ合い、そこから正しい人間関係を身につけるよう、心がけていくことである。

（津田塾大学）

\* \* \*